

『安楽死・尊厳死の現在』

松田純

中公新書／2018年12月／860円（税別）

2001年に世界で初めて安楽死を合法化させたオランダでは、その数は増加の一途をたどり、近年は年間6000人を超す安楽死が実際に行なわれるに至っている。そして、こうした安楽死容認の動きはベルギー、ルクセンブルク、カナダ、スイスなど世界各地へも確実に波及を続けている。本書は「最終段階の医療と自己決定」という副題にも示されている通り、積極的安楽死と消極的安楽死、さらには日本で盛んに用いられる尊厳死などの用語・用法の整理や、精神疾患や認知症患者への適用をめぐる噴出してきた諸問題、究極の自己決定とも言える「死ぬ権利」にも焦点を当てている。超少子高齢社会、インフォームド=コンセント、新しい人権の一つとされる自己決定権なども深く関連し、授業内やディベートで取り上げる際に大いに参考となる事例も多く提示されている。

『戦慄の記録 インパール』

NHK スペシャル取材班

岩波書店／2018年7月／2000円（税別）

太平洋戦争中で最も無謀だと言われた、補給を無視した作戦がなぜ行われたのか。その実相はいかなるものだったか。取材班は作戦責任者の遺族から貴重な記録を預かり、襟を正して取材する。明らかにされる戦争の愚かしさ、恐ろしさ。

戦後ネパダで行われた、核戦争に備えて、核爆発直後の現場に通常の戦闘服で行進させられた若い兵士たちを想起した。その作戦を立案した人は生き延び、犠牲になるのは、いつも若者だ。

『百姓一揆』

若尾政希

岩波新書／2018年11月／820円（税別）

思想史を専門とする著者が百姓一揆をどう描くのか興味深く思い、手に取った。いわゆる「百姓一揆物語」を史料として用いる職人芸の一端を垣間見ることができ、近世社会のイメージを膨らませてくれる。期待以上だったのは、百姓一揆に関する研究史整理と、教科書記述に基づく誤解を解いている部分だ。後者はたとえば幕府による儒学の採用について、代表越訴型一揆を取り上げている。高校生に授業を行う上で知っておきたいことだろう。

『子どもとつくる平和の教室』

小菌崇明・渡辺哲郎・和田悠編著

はるか書房／2019年1月／1900円（税別）

小・中・高・大学での戦争学習や平和学習に関する授業実践集である。歴史だけでなく公民科の実践も掲載されている。共通しているのは、子どもが主体的に学ぶ授業を展開していることだ。アクティブ・ラーニング（AL）とどこにも書いていないが、授業の方法はALそのもので、その授業実践記録が他の書籍よりも長めに掲載されているために、具体的に授業の様子が見て取れる。今後そういう授業を試みようとする人の手引きにもなるだろう。また、高校日本史での討論授業で有名な加藤公明氏が、大学で中学校・高校教員をどう養成したかがわかる、加藤氏のゼミ生だった若手教師の座談会も読みどころだ。

『戦国日本と大航海時代』

平川新

中公新書／2018年4月／900円（税別）

さいきん歴史が面白い。以前、「聖徳太子」「源頼朝画像」などをめぐってテレビ各局が特集を組んだが、近頃は信長、秀吉、家康を取り上げた興味深い出版物が次々と刊行されている。

与太話はたくさんだが、一次史料を読み込んだ上での、新しい視点や仮説の提示は大歓迎だ。本書で一番教えられたのは、秀吉や家康が宣教師などのヨーロッパ人から“Emperor”（皇帝）と呼ばれていたことだ。神聖ローマ皇帝にしか許されない呼称、それが何を意味しているか。

秀吉の朝鮮出兵、伊達政宗の慶長遣欧使節、幕府の「鎖国」政策に諸国が唯々諾々と従ったこと、これらに次々新しい解釈が加えられていく。知的興奮をおぼえた。「歴史総合」の好素材ではないか。

『常勝集団のプリンシプル』

岩出雅之

日経BP社／2018年3月／1500円（税別）

著者は、一弱小チームに過ぎなかった帝京大学ラグビー部を、大学選手権9連覇という偉業を成し遂げる文字通りの常勝集団に変貌させた伝説的指導者。集団を率いるリーダー自身がまずは変わり、「脱・体育会」改革で「自ら学び成長する人材」を育て上げる理論・手法は、単にスポーツに限らず、広く教育・ビジネスの世界でも学ぶべき点が多い。